



「やっほー！また来たよ、  
神子姉ちゃん！」

昼下がり、神社に訪れた少年。  
八重神子にとって取るに足りない  
はずの存在に、しかし神子は  
苦渋に満ちた表情で少年を見る。

「童よ、もう来るな、ときつ〜く  
言っておいたはずじゃが？」

「またまた、神子姉ちゃんは  
面白いなあ！」

少年はぱちん、と指を鳴らす。



「んぐっ！」

「…すぐに立場を  
忘れるんだからさあ」

八重神子のお腹に淫紋が浮かぶ。  
無邪気な童を装い、不意打ちで  
つけられたツレのせいで、  
神子は少年に逆らうことが  
出来なくなっていた。

「ボクは別にここでもいいよ、  
神子お姉ちゃん♡  
どうする？」

「と、この…！っ♡」



「……ついてくるがよいっ!」

「はいはい♥今日はお部屋かな♥  
人払いの結界、貼ってね♥」

「~~~~~っ!」

苛立ちを何とか回にせず、  
黙々と少年を案内する神子。

淫紋を起動されると、  
正気が保てなくなってくる。  
はやく人のいないところに行かなければならない。

神子は必死だった。



は  
は

「まったく、好き放題射精しておって…」

むせ返るほどの性臭が立ち込める一室。  
少年の"若さ"をぶつけられた  
オマンコからは大量の精液が零れ、  
幾度もの性交が行われたことを  
証していた。

「あ～♥神子姉ちゃんの肌♥  
すべすべできもちい～♥」

「やかましいわ…♥  
ふう、疾く離れるがよい…♥」

ドロオ



「う～ん。。。でも神子姉ちゃん  
やっぱりオマンコ全然感じないね」

「ふん。妾がどれほど生きているのか、  
童には想像もつくまいな。  
とうに、そんな盛りは過ぎておるのよ」

「ふ～ん。  
でも注いだときは感じてたよね」

「たわけが、  
それは淫紋のせいじゃるが」

いし

淫紋の効果により——精子を注がれれば身体は発情する。

全く好みでない少年すら、それは魅力的に映るほどだ。  
だが性交にて、性感を覚えているわけではない。

元々感じにくかったのだが、年月を経て殊更に感度が失せたようだ。  
少年のチンポは大きいようだが、それ以上の事は感じない。

むしろ息苦しくて、もう少し小さくならんかの、と思う。



「でも、僕は神子姉ちゃんにも  
感じてほしいな」

「こ、こら、そこはダメじゃと」

「ちょっとだけだから、ね？」

「ちよっとなんて何じゃ！  
絶対嘘じゃる！  
や、やめっ、あっ♥」

ガ  
ル  
ン





じゅるるっ♡れるれるお♡ちゅぽっ♡

「ん♡んう、お〜〜っ♡♡♡お♡♡♡」

特段、乳首が性感帯であったわけではない。  
しかしマンコよりは  
有望であった乳首の感度が、  
淫紋の発情によって倍々に引き上げられたのだ。

結果

時の彼方にメスを忘れたはずの八重神子が、  
少年から乳首を啜えられて  
嬌声と共に悶絶している。



「ん♥おっほ、ほお〜♥♥」

「えへへ、神子姉ちゃんのおっぱいおいし♥」

じゅるるっ!ぷちゅうっ♡れるれるっ♡♡

「やっっ♥♥おっ♥♥おっ♥♥いひいっっ♥♥」

ぼん

ぼん

ぼん

ぼん



「神子姉ちゃんのおっぱい好きだな♥  
これからも僕が吸いたい♥  
って言ったら吸わせてよ、いいよね?♥」

「い、いいわけあるかあっ♥♥」

じゅぞぞっ! れるれるっ、ちゅばあっ!

「~~~~~ツツ♥♥♥♥」



じゅるるるっ…少年が乳首を強く吸う。  
淫紋によって高められた乳首は真っ赤に晴れ上がり、  
痛々しいほどに勃起している。

「乳首はこんなに素直なのに、神子姉ちゃんは意地っ張りだね」

「おっ♥や、やめよ、そんなに強く吸っては♥  
っほ♥んおうッ♥~~~~~ううんッ♥」



「素直になれないお姉ちゃんには、  
お仕置きが必要だね♡」

じゅるるるる~~~~♡かぶ♡はぶ♡

「んっ♡ひおっ♡囁むな！吸うのもだめじゃ！」

「めっ。お仕置きだよ」

乳首を甘噛みされ、  
八重神子の身体がびくびくと跳ねる。

「お、おおうら~~~~ツ♥♥♥」

じゅるじゅるっ♥♥れるおっ♥♥  
かぶかぶ♥ちゅっ♥♥

「だめ♥だめじゃから♥お♥あっ♥ひっ♥♥」





「神子姉ちゃんの乳首…  
すごく熱く、固くなってきた♡  
イキそうなんだよね?」

「だ、誰がイク、かぁ♡ぐんぐん♡」

「一緒にイこ♡  
神子姉ちゃん♡」

「こ、このっ、話を、聞けっ♡♡  
うおおおおっ♡♡♡♡」

じゅるるるっ♡♡かぶ♡  
れるお♡♡ちゅぽっ♡♡



「ぐんっ♥♥おっ♥♥おっ♥♥~~~~っ♥♥」

(だ、だめじゃ♥何とか耐えっ♥♥くっ♥ううう♥♥)

必死に絶頂を堪える八重神子の表情。  
少年はそれを見で、もう片方の乳首を指でつまみ――

くりくりくりくりくりっ♥♥♥♥♥♥♥♥



「おッ♡りよッ♡両方っは、反則♡  
じやろおっっっっ♡♡♡♡♡♡」

必死に堪えていた官能が、  
両乳首の愛撫で決壊する。  
爆発的な官能が、背筋を通じて  
脳髓を甘く痺れさせていき

どぶん♡びゅくる♡びゅぶるるるっ♡♡ぶびゅっ♡♡  
ぽびゅるるるるるるるっ♡♡♡♡♡♡

膣内に精液が、口内に母乳が、同時が流れ込む。

「んっ。。。んく。。。ごく。。。♡」

少年は嬉しそうに、  
喉を鳴らして母乳を飲み下してゆく。





「ひゅっ♡♡こ、この♡♡  
か、勝手に、射精しておってえ。。。♡」

言葉と裏腹に、八重神子の声色は甘い。  
理性は噴乳絶頂で薄れ、  
注がれた精液に共鳴した淫紋が、  
とくん♡とくん♡と甘い鼓動を  
全身に刻ませる。

神子の視線は  
快楽への期待に  
染まりつつあった。



「神子ねえちゃん♡すきっ♡  
じゅるるるっ♡かぶ♡♡」

「お♡と、こらっ♡  
もう射精したであろうっ！まだする気かっ」

「神子姉ちゃんになら、  
いくらでも射精できるよ！！！」

「そ、そういうことではないっ♡  
お、やめ、囁むなっ、へえ♡♡」



勢いのよい抽挿の水音は、止むことなく続き

一時間後。  
漂う性臭はより濃密に、  
水音は変わらぬ感覚で弾けていた。

「ほっ♡お♡らめじゃ♡♡乳首♡  
またっ♡♡イ、グッ♡♡♡♡♡」

ぶびゅっ♡びゅるるっ♡♡どぶっ♡♡  
びゅるるる〜っ♡かぶかぶ♡ちゅっ♡♡

「神子姉ちゃんの乳首、実においしいよ♡」

「だ、だめじゃってえ…♡♡も、おおんッ♡♡  
イ、イクラ♡♡あひっ♡♡ひううらッ♡♡」



(い、いかん♡  
いったいいつまで続くっ!?♡♡♡)

しや、射精のたびに考えがぼやけて♡♡♡♡  
イ、イクたびに頭がおかしくなりそうじゃっ♡♡♡♡

あ、ありえぬっ♡  
いいようにされておるっ♡♡  
妾、が♡このような童、にい♡♡♡

いっ♡♡♡♡♡  
うそじゃあっ♡♡♡♡♡  
さ、さっきいったのに、ア♡♡  
またイグラッ♡♡♡♡♡)

♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡



ほぶんっ♡びゅぐりゅりゅりゅう♡♡♡

「おっ♡ほっ♡んほおおおッ♡♡♡

イ、イクラッ♡♡

お~~~~♡♡

お~~~~♡♡」

(あ、頭おかしくなるッ♡♡

狂ってしまうっ♡♡

た、耐えっ、耐えねば、

ならぬのにッ、イ♡♡)



二時間後



「ほおおおおおおおっ♥♥♥♥♥まらでるう♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥  
おっぱいびゅ〜びゅ〜でるううううううう♥♥♥♥♥」

「僕もまだまだ射精るよお!!!うおおおおおおお!!!」

「んひひひひひひひひひひひひひひひッ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

三時間後



「お~~~~っ♥♥♥おお~~~~っ♥♥♥  
しぬうっ♥しんで、しまふうううッ」

「大丈夫♥僕みたいな若造に  
神子姉ちゃんが○せるわけないから♥♥  
まだまだイカせてあげるね♥♥じゅううううっ♥♥♥♥」

「おっほおっ♥♥んほおお~~~~っ♥♥  
おおんっ♥♥イグイグッ♥♥おう~~~~っ♥♥」

四時間後



「お〜っ♡♡お〜っ♡♡♡  
んお〜〜っ♡♡あへっ、へええっ♡♡」

「ふう。。。神子姉ちゃんのおっぱい、  
出なくなってきたね。噛めば出るかな？」

「おおおおおおおッ♡♡でりゅ♡♡でしゅぎりゅ♡♡♡♡  
も、もう。。。むりい。。。♡♡ひいっ♡」



おっぱい

ずぼ

「あへえ・・・♡♡あ、へひっ♡もっ、お~~~~っ♡♡♡  
むりいっ~~~~っ♡♡まけじゃ♡♡♡♡♡  
妾のまけでイイからああああああ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

「神子姉ちゃん、負けちゃうの？  
いつも綺麗な神子姉ちゃんが負けるところ、見たくないな♡  
ほら、もっと頑張ってよ♡こりこり♡じゅうううううう♡♡♡」

「はおおおおお~~~~っ♡まらイグっ♡  
イクらっ♡♡イキ死ぬうう♡♡あへっええええ♡♡」

おっぱい

エロっ

エロっ

おっぱい

五時間後